10代の子どもたち（中高生）の子育て支援ボランティア養成事業
山口県

8講座

実施団体　特定非営利活動法人　子ども劇場山口県センター／特定非営利活動法人　うべ★子ども21
実施日　2005年1月9日（日）・18日（火）・22日（土）・25日（火）・2月3日（木）・9日（水）　参加人数 のべ187名

	日時	講座名	講師
講座1	1月9日（日）	「命の声を聴く 自己尊重ワークショップ ～フィーリング トレーニング～」	手塚　千砂子氏　NPO法人自己尊重プラクティス協会代表理事 心のレッスンルーム「心のジム　テヅカ」主宰
		日常の身体の営みに感謝し、心と身体に耳を澄ませ命の声を聴くという今までにない体験をした。	
講座2	1月9日（日）	「命の声を聴く 自己尊重ワークショップ ～ラブライフ トレーニング～」	手塚　千砂子氏　NPO法人自己尊重プラクティス協会代表理事 心のレッスンルーム「心のジム　テヅカ」主宰
		他と比較しない自分の良さや他者の良さを認め、また認めてもらう事の心地良さを実感した。	
講座3	1月18日（火）	生と性「いのちはどこから」	田村　晴代氏　下関市藤野産婦人科医院副院長
		胎内に宿る受精卵に命の尊さを謙虚に受け止め、10代の妊娠・中絶が多い中、幸せな心から喜べる妊娠を迎える事の大切さを実感できた。性感染症の多さから正しい性知識の必要性を感じた。	
講座4	1月22日（土）	子育て中のお母さん	土屋　美恵子氏　NPO法人日本子どもNPOセンター専務理事　武蔵野市議会議員 NPO法人保育サービス　ひまわりママ前理事長
		合計特殊出生率が年々低くなっており、少子化の要因から現代の子育てに必要な施策（子育てサロン・保育サービス・共働きの勤務形態等）について学んだ。	
講座5	1月22日（土）	子育て支援について	土屋　美恵子氏　NPO法人日本子どもNPOセンター専務理事　武蔵野市議会議員 NPO法人保育サービス　ひまわりママ前理事長
		保育とは、生活する力を育てていくことであり、見守る事であって、子どもが伸びようとする力を信じて待つ事が大切。また、託児に向けて、保育の意味と保育者としての心得について学んだ。	
講座6	1月25日（火）	命と出会う「赤ちゃんふれあい体験」	高村　繁美氏　宇部健康推進課母子保健係係長
		受精から誕生までの過程を通し、命の誕生と健やかな成長を願う親の気持ちを感じ、更に親への感謝の気持ちを素直に実感した。人形を使った育児体験を通し育児の楽しさや留意点を学だ。	
講座7	2月3日（木）	幼児の発達とリズム遊び	今村　方子氏　山口芸術短期大学　保育科教授
		一対一での遊びから集団による遊びの実践を通して、触れ合って遊ぶ楽しさを体験した。身体や言葉で表現する遊びも体験し、実践への意欲を高めることができた。	
講座8	2月9日（水）	伝承あそび	藤岡　明子氏　宇部短期大学名誉教授
		幼児～小学生の子どもとできるわらべ歌遊びや、長縄、ボールを使った遊びを体験し、自分の子ども時代と重ねながら楽しんだ。乳児の抱き方・あやし方等を含め託児の心得を学んだ。	

体験ボランティア

実施団体　特定非営利活動法人　子ども劇場山口県センター／特定非営利活動法人　うべ★子ども21
実施日　2005年2月11日（金・祝）・19日（土）・3月5日（土）　参加人数 のべ82名

	日時	場所	内容
実践1	2月11日（金）	宇部市福祉会館　3F談話室	一般から0～2才の子ども達を募集。受付から迎えまでを一対一で責任を持って担当できた。おむつ交換・授乳など講座での学習が生かされた。頼られた喜びと自信で晴れやかな顔が印象的だった。
実践2	2月19日（土）	宇部市福祉会館　3F談話室	主に3～5才の幼児を中心に託児。男の子とは肩車をしたり身体ごと触れ合ったりとはしゃいでいた。女の子は、積み木やお絵かき、折り紙等で遊び、中高生も童心に帰って一緒に楽しんでいた。
実践3	3月5日（土）	宇部市文化会館　第2研修室	幼児～小学生と比較的年齢の大きい子ども達を託児。元気で走り回る年齢であるにも拘らず、一対一で向き合ってくれる安心感からか、全体に落ち着いてじっくり遊んでいるのが印象的だった。

事業を終えて

部活動、塾等で多忙な10代の子どもたちを募集するにあたり、30人集まるだろうかと心配だった。そのため全県での取り組みは不安があったため、今回は一つの市に集中して取り組む形をとった。多色刷りのチラシを作り、市内の全中学校・高校にチラシ配布をお願いできた事で予想以上に反響があった。

全講座8回・実践3回を通して31名の登録者があり、平均すると毎回約24名が参加した。この事は、今の子どもの現状を思うと大変な事で、やはり毎回の講座内容が充実しており、参加意欲を高める事ができたからだと思う。また、子どもたちに子どもが好き、将来保育士を目指したいという前向きな気持ちがあり、毎回受講態度は真面目で、熱心に学ぶ姿が印象的だった。反面、周りを意識して心を開く事が苦手な様子も見られ、集団の中で自分を表現する事に不慣れな様子も窺えた。

子どもたちの受け入れとして、サポーターとスタッフの体制をとった。サポーターは子どもの気持ちに添う立場として、宇部市で開設している子どものひろば「ほっとサロン」のサポーターを中心にお願いし、スタッフは子ども劇場の中心メンバーが責任を持った。それぞれの役割を明確にしながら責任を持って子どもと向きあう事ができた。特に実践では、ベテランのサポーターの後押しの一言があることで、10代の子どもたちは安心して託児をする事ができた。また任意に集まった集団なので、学校のつながりで固まってしまう状況があり、サポーターがいることで、子ども同士のいい関係をつくるクッションの役割を果たした。

今回の講座では、ワークショップの良さを改めて感じた。

先ず自己肯定感を育てるワークショップでは、10代の子どもたちにとって素直に自分の良さを認め、自分自身を大切に思う体験となり、心を開き、他者の存在＝全ての命を認め受け入れられるやさしさに繋がった。

遊びのワークショップでは、自分の子ども時代と重ね合わせ、触れ合って遊ぶことの楽しさや子どもにとっての遊びの大切さを実感できた。

命の誕生～成長・発達を学ぶ全8講座を終えた事で、託児実践では受付から親への引渡しまでを、一人一人が責任を持ってできた。泣いたり、不安がっていた赤ちゃんたちも、いつしか子どもたちに身を預けて安心して抱かれて眠ったり、うち解けて遊びだした。ただ、託児のためにおもちゃ等を用意しすぎたため、受け継いでいく文化として、講座の中で伝承遊びや伝承うたを学んだにも拘らず、実践に活かすことができなかったのが反省点であった。

迎えに来られた保護者に対し、やり遂げた満足感で晴れがましい表情で受け渡す10代の子どもたちたちの姿は感動的だった。実際に乳幼児と出会ったり、両親から頼られ任されたという自信は、全8回の講座があってこその成果だと感じた。

「生命（いのち）と向きあう」というテーマに対する考察

子どもたちは、理屈では命の尊さをわかっていても、日常の生活では実感として持ちにくい中で、産む性、生まれてくる命、育む命について専門家の講師から学んだ事は成果が大きかった。映像を通して出産の様子に感動し、生まれてくる命の重みを感じ、命に対する敬虔な気持ちを実感として持つ事ができた。

子どもたちは自分自身もたった一つの大切な命として、親や周りから祝福されて誕生し、愛情を持って育ててもらったことに、親への感謝の気持ちを素直に感じることができた。親の愛情を確認できたことで自分の存在価値を感じることに繋がっていった。

また、楽しいだけではない子育ての大変さを社会的背景から捉え、子育て支援の大切さを学んだ事も新たな視点となった。

更には10代の妊娠・中絶・性感染症の多い現実に、正しい知識を身につけ自分の生き方を考えていこうとする気持ちになった。

今回の事業を全てふりかえって子どもたちからは、学校ではできない貴重な体験の機会となり、またやってみたいという嬉しい感想ばかりだった。自分を含めた命の誕生について深く学び、愛情を持って大切に育てられたという実感が、次に命を産み育むことへの喜びにつながった。この事を実証でき、今回のプログラムの素晴らしさを改めて感じた。

独立行政法人医療機構（子育て支援基金）助成（事業）

中高生のみなさん

子育て支援ボランティアを目指しませんか

10代（中高生）の子育て支援ボランティア養成事業

青春真っ只中を生きている10代の皆さん、
“性と生”について学び、柔らかい命と触れ合って子育ての楽しさや大切さを体験する連続講座に参加してみませんか？

『自分という命』はかつてお母さんのお腹の中で守られ、たった一人の自分としてこの世に生まれてきた大切な存在。その事を実感し、また近い将来親となった時に向き合う『産み、育てる命』について考えます。

学校外での仲間やいろんな大人との出会いから新たな発見があるかもしれません。充実した内容で、あなたの参加を待っています。

期　　間　2005年1/9(日)～2/19(土)
講座……全8回・実践……全3回（裏面の研修日程参照）

場　　所　主に宇部市福祉会館

参加対象・人数　市内の中学生・高校生合わせて30人

参　加　費　全て無料

お問い合わせ　NPO 法人うべ★子ども21
TEL/0836-21-9114（月～金・10時～17時）

申し込み先　下記まで郵便かFAXで申し込んでください
〒755-0047　宇部市島2丁目4-34
NPO法人 うべ★子ども21
FAX/0836-22-3210

締め切り　2004年12月24日（金）

【主催】NPO法人子ども劇場全国センター　【協力】NPO法人子ども劇場山口県センター
【担当・連絡先】NPO法人 うべ★子ども21　【後援】宇部市・宇部市教育委員会・宇部日報社

切り取り

10代（中高生）の子育て支援ボランティア養成事業に申し込みます

ふりがな 氏名	TEL －	学校名	学年 年
〒　－ 住所	FAX －	中学校 高等学校 その他	年令 才

独立行政法人医療機構（子育て支援基金）助成事業

乳幼児を持つお母さん

リフレッシュタイム利用しませんか

主催：NPO法人子ども劇場全国センター
協力：NPO法人子ども劇場山口県センター
担当：NPO法人うべ★子ども21

毎日子育てがんばっていらっしゃるお母さん、ちょっと子どもを預けてフリーになれる、"リフレッシュタイム"を利用しませんか？

1月9日(日)より、10代の中高生達が『命』について学ぶ連続講座がスタートしています。(裏面参照)

そこで、2／11(祝・金)の実践1のなかで、受講生の子ども達がお世話する乳幼児を募集しています。主旨をご理解いただきご協力くださる方は、裏面の申し込み用紙にご記入の上、FAXまたは郵送でお申し込みください。

日時 2005年2月11日 金・祝 10:30～12:00

場所 宇部市福祉会館（3F談話室）

対象定員 0才（首がしっかりすわっている子）～2才児、20名 定員になり次第、締め切ります。

参加について
- 持ち物には、名前を（タオル・オムツ・ミルク・着替え…など）
- 子どもを預けた後、1時間半は自由にお買い物等で、リフレッシュしてください。
- その間、サポーター・スタッフの大人が万全の体制をとっておりますので、ご心配いりません。

参加費 保険料として100円

問合せ NPO法人　うべ★子ども21
〒755-0047 宇部市島2丁目4-34(月～金10:00～17:00)
TEL:21-9114／FAX:22-3210

講師からのメッセージ

手塚　千砂子氏

Tezuka Chisako

NPO法人自己尊重プラクティス協会代表理事
心のレッスンルーム「心のジム　テツカ」主宰

「命の声を聴く 自己尊重トレーニング」
フィーリングトレーニング と ラブライフトレーニング

このワークショップは、子どもたちに「自分の命に対する尊重感を、頭の理解ではなく、内面的な感覚、感動を持って受け止めてもらう」というもので、① 自分の命に組み込まれている多くの力について考える② からだを動かしながらからだを感じ、からだの声、心の声に耳を傾ける③。 自分の良さ、長所などを探し、自分をほめる 自分の命を育ててくれた人や存在、自然、環境について考える、という内容です。

今まで「考えたことがない」課題に、子どもたちは初めのうちはとまどいを見せていました。しかしワークの流れとともに、感性も開かれていって、「命の大切さ」を感覚的につかみとれたのではないかと思います。終了後のアンケートには、いきいきとした感想がたくさん綴られ、10代の子どもたちとともに命に向きあうことの大きな手ごたえを感じました。以下、感想の一部を抜粋します。

「ほめることってホントに大事なんだなぁと思ったし、命を感じられるのは幸せだと思った」
「自分が今こうしているのは、たくさんの人やもののおかげだということを改めて実感した」
「自分にもいいところがあるんだなぁと思った。命の大切さがわかった」
「自分をほめることで、こんなに安らげて落ち着けると思っていなくて、とてもいい経験になりました。自分をもっと大事にして、もっと楽しく生きたいです」
「自分を否定していたけど、このワークショップで自分を肯定することができた。この体験を生かして、夢を実現していきたいと思います」
「今まで知らなかった自分に気がつきました」
「自分の中で血はちゃんと動いているんだなぁと思いました」

土屋　美恵子氏

Tsuchiya Mieko

NPO法人日本子どもNPOセンター専務理事
武蔵野市議会議員
NPO法人保育サービスひまわりママ前理事長

10代の子どもたちフレッシュなエネルギーをたくさんありがとう!

こんなにも素直に乳幼児にかかわりたいと思い保育実践を楽しみに講座を受けている子どもたちの真摯な姿に感動しました。今回の大きなテーマでもある「いのち」を講座にどう織りこむかが、私に課せられたようです。

- 受容（リラックスタイムより）
- 子育ての現状、社会の情況。今後は…。
- パネルを通し子どもの心になってみる。
- あなたを待っている子育てボランティアのノウハウ

以上を内容にして進めてきました。

誰もがはじめての出会い、集団（講座、託児）に参加する時は、若干の緊張やとまどいをするものでしょう。ここで共感して欲しいと願うことは、“他人を批判せず丸ごと受けとめる”。
赤ちゃんでもおとなでもみんなひとりの人間、同じことば、行動に見えてもいろいろな思い考え生い立ち等が背景にあることを知ってもらいたい、そのことを出会った仲間とリラックスして講座に参加してくださればと思い、しりとりバージョンや身体を動かすゲームなどを導入しました。その結果、遊ぶ楽しさを思い出したり、いろいろな気持ちを汲みとるヒントにもつながっていったようです。

また合計特殊出生率1.29の数字が表しているような子育ての現状や社会の情況なども話しました。新聞のキリヌキや具体例などを活用すると「子育て中のお母さんはいろいろ悩みがあって大変」「私のお母さんもそうだったのかな」「でも子どもを育てるのはステキなこと」「働く女性を支援している保育園や幼稚園の具体的なことがわかった」「自分もこんな風に育ったんだ」と親やまわりの人たちとのかかわりを思い出し、各自のふりかえりにつながっていったことはとてもうれしいことです。

家庭や社会の環境が多様化しています。情報収集や対応策を学ぶことは大切です。

保育実践で10代の子どもたちが乳幼児にむける輝く笑顔と行動力、そして安堵して抱かれている乳児、遊んでいる幼児があるかぎり、命の連続につながるのでしょう。

この事業を通してみえた子どもの現状

一般公募で集まった子どもたちは、保育士希望とか、子どもが好きという子どもたちがほとんどであった。子どもたちは、自ら応募してきただけあって、学校帰りに駆け込んで来たり、講座ごとに全員が毎回アンケートを自分の言葉で書くなど、まじめである。全体的に集中力、理解力に優れていた。講座を追う毎に次の講座が楽しみになったと関心が高まっていく様子は、逆に周りのおとなを励ましてくれた。

「自己尊重トレーニング」を体験し、凝っていた身体がほぐれ、心も身体も楽になり、心にゆとりができ、心が優しくなった。また、自分が自分であっていいという自己肯定感と共に、自分に自信を取り戻していった様子がうかがえた。

ゲームを通してふれあい、それまではお互い硬くなっていたが、仲間になれて、講座が終わってもにぎやかに話し込むようになった。その中で「久しぶりに遊んだ」という言葉が印象に残り、それは、日常生活にはない時間を楽しんだと想像できた。また、「歌や遊びを通じて、小さい子の喜びがあることが印象に残った」と小さい子へのまなざしを育てていた。

生と性の講座では、「中絶はいけない。人の命はまだ生まれてなくても、他の人や親が決められるほど軽いものではない（中学生）」と深いところで理解を示し、その点では、中学生も高校生も差はないようである。

講座を重ねる中で「たくさんのことを学び、考えたり、遊んだりと毎回が楽しく、子どもたちと遊びたくなった。実践する日が今からとても楽しみ」と実践への期待も生まれ、当日を迎えることができた。泣く子を抱えてお互いに硬く固まっている組が何組かあり、思わず「がんばれ！」の声援を送る場面もあったが、最後まで投げずによくがんばり、「最後には子どもに遊ばれた！」「子どもを楽しませることはすごく大変、疲れるけどすごく楽しかった」と子どもたちの顔は明るかった。子どもを親に渡す時は、頼られた嬉しさと自信で晴れやかな顔が印象的だった。

講座の始めのころ、おとなの意外性をつく今の子どもたちに出会う場面がいくつかあった。第1回講座のとき、子どもたち各自でガムテープの名札を作製してもらうよう、受付にガムテープと数色のペンを用意したが、子どもたちは何色を使うのか、フルネームか、漢字で書くのか仮名で書くのかを、確かめるなど意外と手間取っていた。このことから、子どもたちの現状が垣間見え、おとなたちにとっては考えさせられる場面だった。

また、「自分をほめる、隣の人をほめる」ワークショップでは、言葉が弾まなくてとても時間がかかった。感じることやそれを言葉で表現する体験が少ないことを表しているのだろうか。また、ある講師が子どもたちの言動をみて「あくまでも自分のペースね」と言われていたが、相手と調子を合わせていくことがなかなかうまくいかなかった。赤ちゃんをあやす体験で鍛えられるだろうかと期待した。

講座を通して、みごとに子どもたちは「いのち」の誕生に感動し、育児の大変さを知ることで、自分が父や母に大切に育てられたことを重ねて理解していた。家族への感謝の気持ちがわき、今から「いただきます」とか「ごちそうさま」とか「これおいしーね」と言いたいと思ったと、とても素直に受け取っていた。

この講座を受けて、「これからのこと（自分の生き方）をよく考えたい、自分を見つめ直すことをしようと思った」と、子どもを生み育てる意味やいのちの重みを深く理解し、自分の生き方を考えることとして受け止めていた。「子育て中のお母さんの大変さがわかった。少子化が進んでいることにつながっていると思う」と社会へ目を向ける子どももいた。また、講師陣との出会いは、「自分の仕事を楽しそうに語り、誇りを持っていると感じた」とおとなへの尊敬と信頼感を育てていた。

子どもたちは、その機会さえあれば素直に受け止める力、自分を見つめる力を持っている。子どもたちに期待して、「いのち」の重みを伝える講座を継続していくことが望まれる。合わせて子どもたちの社会参画の場としてシステム化を図ることが重要である。